

芥川文学における人間性追及

顧 也 力

摘 要

芥川文学对人性的追求

顧 也力

多年来，对作家芥川龍之介及其作品的研究可謂广泛深入，碩果累々。本文力图通過对芥川作品的分析，客觀实证地探討芥川文学探索人性這一文学主题。

芥川对人性的認識，由于他自身的失恋，而发生了根本变化。少年時代，家人的所作所為使他朦朧地認識到人性的自私。而失恋事件則使他徹底領悟了人性的利己。于是芥川塑造了“羅生門”中的下人形象，确立了探索人性的文学主题。

芥川对人性的認識，在理論上頗受世紀末思想，特別是叔本華思想的影響。在文学創作上芥川塑造了各階層衆多的人物形象。从種々不同角度来揭示人生，深化自己的文学主题。可謂堅韌執着。

随着对人性探索的不断深入，芥川对人性的利己主義由諷刺，鞭撻，到徹底絕望。最后在“不安”中自決于世。芥川龍之介的自殺或許可以說是他人生的失敗。但却給他的文学画上了一乍完美的句号。

(一)

周知のように、芥川は母が発狂したため、芥川家の養子となったのである。芥川の養家は中流下層階級の生活をしていた。明治時代の下町の旧家では芥川家のような中流下層階級にしてもすべての生活の上に煩瑣な方式があり、細かいしきたりが守られる。衣食住の上に礼儀作法の上に、また言葉遣いの上にまでそれがある。特に経済的にめぐまれぬつつましい小ブルジョアの家では、精神的なある種の虚栄心が、といって悪ければ、節度を保つこと、折目正しくあること、外聞を憚りとりすましたポーズをとることが周囲の俗人たちに対し、わずかに自らを誇負することになるのである。そのような体裁を繕うために止む得ずおかし日常生活上の偽りは、少年の芥川に深い印象を与えずにはいられなかった。「母は『風月』の菓子折につめたカステラを親戚に進物にした。が、その中味は『風月』どころか、近所の菓子屋のカステラだった。」(『大導寺信輔の半生』全集三、P232)というような事実の堆積が、少年の物を見る目の素直さを奪い、早くから人生の裏側を窺う懐疑的な目と、皮肉な心をいやが上に養わずにはいかなかったであろう。人間のこの虚栄心は、後に芥川の文学創作に大きな影響を与えたと言えよう。

もの心ついて眺めた社会は、芥川にとって、初めから「つゆ空に近い人生」の舞台でしかなく、それは永遠の過去から永却の未来へと続く「地獄よりも地獄的」な人生の舞台と映るばかりである。

大正四年、芥川の心には恋が生まれた。ところが、芥川のこの初恋は家のものから「烈しい反対」を受けた結果、見事に敗北したのである。芥川は大正四年二月二十八日附、恒藤恭宛に書いている。「家のものにその話をもちだした。そして烈しい反対をうけた。伯母が夜通し泣いた。僕も夜通し泣いた。あくる朝むづかしい顔をしながら僕が思ひ切ると云った」(全集七・P81)と。二十二歳の青年が結婚に反対されたぐらいで夜通し泣くというのは、決して普通のことでない。初恋の出来事は、その日頃の問題を、芥川の子精神の浅層から、いや応なく深層へと押し込んだのであった。「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか、イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。……僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。」と、芥川は大正四年三月九日附の恒藤恭宛書簡で述べている。(全集七 P82)

この書簡から察すると、芥川が「ある女」への求婚の話を持ち出した時、最も烈しく反対したのは伯母ではないかと思われる。おそらく、その話をめぐっての芥川と伯母とのけんかは夜通し続いたであろう。芥川が誰よりも愛する伯母から、誰よりも強い反対を受けなければならない自身の立場を思っ泣いた。芥川の涙も伯母の涙もそれぞれに「イゴイズムのある愛」ゆえの涙であったのに相違ない。一生独身だったという伯母は、唯一の生甲斐を芥川を育てることに見出していたのではないか。そして嫁いだことのない女の、芥川を育てるやり方には、一種の偏愛といったものがつきまといはしなかったか。伯母にして見れば、芥川を自分の思

い通りに育てたかったであろうし、芥川の結婚も自分の思いに叶った娘を、自分の頃はよしと判断した時機にもらってやりたかったであろう。そうして、二十二歳の、まだ大学に通っている芥川に結婚話が起るなどとは、夢にも考えていなかったに違いない。そこに、芥川から突然求婚の相談を持ちかけられて、伯母は虚を突かれ狼狽し、あたかも芥川を失ってしまうような、不安に閉ざされた。しかも、相手の女は新原家の縁続きの娘である。日頃、芥川を実家に取り返される心配を胸中に潜めていた伯母は、その心配が現実の事になったと錯覚しないでもなかったであろう。ともかくも自分の目の届かない道路へ手放してしまうことなど、とてもできなかった。それゆえに、伯母は夜通し泣いて芥川の翻意を促したのである。

芥川にはこの伯母の気持ちがわかりすぎるほどわかった。伯母の愛は、痛いほど身にしみていた。それだけにこの伯母の愛を弾き返すことはできなかった。が、おとなしく伯母の愛を受け容れてばかりいるにはもう芥川は青年になりすぎていた。芥川の伯母を見る目もエゴイズムのある愛であるよりほかはなかった。伯母を愛しはしたが、そのために自己を失うわけにはいかなかった。おそらく芥川は伯母に背くのではなく、それとは全く無関係に「ある女」を愛するのだと、繰り返し説明したのにちがいない。そして、そうしたことの通じない伯母に腹を立て、遂には情けなくなって泣き伏したのであろう。伯母に対する愛と、「ある女」への恋情と、この全く別なものが矛盾なく一本に納まらなければ、話の解決しない奇妙な人生のありさまを芥川は烈しく憎んだが、結局二者択一、芥川は恋をすて、伯母への愛をとらなければならなかった。しかし、「イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない」と思い、伯母と自分とは互い愛し合いながら生涯けんかをしながら暮らさなければならぬと芥川は考えたのである。そういう宿命を負わせた「神の仕業は悪むべき嘲弄だ」と怨んだのである。

この短い期間の失恋によって芥川は人間の胸の奥底に潜むエゴイズムというようなものに、思いを向けるようになり、恒藤宛の書簡でも「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか」と言っているように、愛そのものの中にもエゴイズムを認めざるを得ないほどに深く自覚されるようになった。そして以前からの厭世的な傾向にこの失恋による新しい経験によって、いっそう拍車をかけられたことと思われる。そこで、ともすれば暗くなる気持ちと直面するのを避けるためにも、彼はことさら現実から目をそむけ、なるべくユーモアのある古典の世界に浸ろうとする傾向を強めていくのであった。そこで、『羅生門』『鼻』という小説が生まれたのである。

芥川の『羅生門』は一人の人間の微妙な心理の動きを巧みに追いつつ、人間性における「イゴイズム」を自由な極限状況に人間を置くことによって追求していく。『羅生門』に見られる芥川の間人観が、小説として形象化され得るほどに、いつ彼の内部で育ったのであろうかと言えば、やはり失恋体験によってであると言いたい。失恋事件後まもなくの日附と推量される大正四年の恒藤宛書簡には次のようにあった。「僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな気がする。しかし不幸にしてその新しい国には醜い物ばかりであった。僕は醜い物を祝福する。その醜さの故に、僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知ることが出来たからである。しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にまたよく知る事が出来たからである。」(全集七、P97) いうまでもない、『羅生門』に「イゴイズム」という人

間の「醜い」ものを発見したこと、それはそのまま芥川が自己の恋情を家族に、あるいは弥生に表白し、それが報われなかった体験の、ある再現にほかならない。すなわち『羅生門』は失恋体験により構築された人間の本質への認識を、「歴史」という場を借りて、再現した小説なのである。

(二)

芥川の精神的生活を最初（少年期）に支配したのが下町的環境であったとすれば、第二（青年期）に彼を包んだものは世紀末の空気であった。芥川が当時の世紀末の思想を受け、そしてとりわけ深く共鳴するところのあったのを見逃すことはできない。

芥川の人生観、人間性認識の形成に対して、大きな影響をもたらしたのはドイツの哲学者ショーペンハウエル・スティーナの思想である。特にショーペンハウエルの哲学思想、人間性探求の精神は芥川の生活にも、文芸作品の創作にも染み込んでいたと言えよう。芥川は『大導寺信輔の半生』の中に次のように書いている。「彼も亦あらゆる青年のやうに、いつか哲学に溺愛してゐた。特に二三の哲学者は彼に神々も同じことだった。信輔は何人かの手垢のついたショオペンハウエルを読むために夜を徹したことを覚えてゐる。（中略）信輔は勿論厭世主義の哲学に——殊にショオペンハウエルのアフオリズムに彼の厭世主義を弁護する無数の武器を発見してゐた。」（全集六、P333）

周知のように、ショーペンハウエル哲学の中核をなすものは一言にして言えば、意志こそは人間の本質であり、すべての人間は利己主義者であるが、その人間の利己的生活意志は現実社会では満足できないから、人生が苦痛ばかりに満ちたものであるということである。芥川はこのような唯心主義の思想を受けながら、人間性のエゴイズムを深く追及するようになったのである。芥川の持った思想基礎はこのようなものであったから、彼は当時の理想主義のモットーである「正義」や「人道」が必ずしも美しいユマニテの生活感情から出たものではなく、利己的な、排他的な感情に基づくものであることを知っていた。偉大な人間の前に虚心に低頭し、自己をも英雄の台座にのぼし勝ちな理想に反して、表面的な偉大な、美しさの裏に、平凡な醜さ、賤しさを探り、自己をも含めた人間に対する憐憫と軽蔑を感じようとして、このように、個性に徹して、その底に個々の人それぞれの自我主義、利己主義をつかもうとする芥川の方角は、理想主義のいわゆる「普遍的人間性」の思想とは全く反対の方角をさすものではなかろうか。そして、芥川は人間性探求として、このような人間性認識および薄暗い人生観を小説にばらまかずにはいられなかったのである。

例えば、大正六年に発表された『或日の大石内蔵助』では、大石をはじめとする武士たちは武士道から従って義挙をして、世間に過分の評価をされると同時に、大石と彼の朋党の人間性の本質も現れている。大石らはすべてが社会秩序を支える武士の倫理、封建道徳を守り、これを持続し、そのことによって己を全うしようとするということが、義挙の動機だと言えよう。つまり、大石らは自分の武士としての名誉を保つため、そうした「復讐」をしなければならぬのである。だから、エゴイズムという人間性が大石らの行動原理として据えられている

事実は彼らの復讐と無関係ではないと言わざるを得ない。芥川にとっては、いかなる人物のいかなる行為も、自己の利己的な考えによって行うものであるから、内蔵助を通して伝統の「武士道精神」を否定し、人間のやるすべてのことは人間のエゴイズムに支配されることを暗示することが、この作品を書く上での意図であったと言えよう。

同じ歴史物で、「貞節な烈女袈裟」という伝統説の袈裟像に対して、恋愛の心理の分析から新しい解釈を示したのは『袈裟と盛遠』である。袈裟と盛遠の愛と憎の関係は、芥川の中で最も複雑なものと言えよう。小説の中の盛遠の人間像ははっきりしていて、その人間性も露骨に現れている。盛遠は袈裟を愛しているどころか、「恨みさへも感じている」。

さて、一方彼らの不義の関係が成立した際、袈裟は盛遠の目の中に、自分が昔の美しい袈裟ではなく、肉体的にも衰えた中年女であることを読みとると同時に「あの人の心に映ってゐる私の醜さを見つけた時、私は私の嬉しさが一度に消えてしまったやうな心もちがする。」（全集一、P260）と彼女は告白する。彼女は今まで自分が美しいという意識と武士の貞淑な妻であるという誇りにささえられて来たので、盛遠はこの二つの重要な支えを奪うことによって彼女を生ける屍にしてしまったわけである。「その時の私こそ、あの路ばたに捨ててある死体と少しも変わりはない」。ところが、盛遠が彼女の耳に夫を殺害する計画を呟くと彼女は突如として、「生々とした気持ち」が突き上げてくるのを感じる。それは夫の死ではなくて、自分が夫の身代わりになって死んでいくという考え、すなわち、死が「生々とした気持ち」を引き起こした彼女は発見する。ここで問題は、なぜ夫の身代わりになることによって死のうとするということである。夫のためであろうか。いやそうではない。その目的の一つは姦通の罪からの贖いを得て、「貞節な烈女」の名誉を守ろうとすることである。「私の夫の身代わりになると云ふ事は、果して夫を愛してゐるからであろうか。いやいや、私はさう云ふ都合の好い口実の後で、あの人に体を任した私の罪の償ひをしようと云ふ気を持ってゐた。自害をする勇気のない私は、少しでも世間の眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。」（全集一、P260）と死ぬことさえも手段とする。典型的な利己主義者の表白ではなからうか。そして、こういう利己心を達するには、自分を頼みにするのではなく、「あの人の利己心をたのみにしてゐる。いや、利己心が起させる卑しい恐怖をたのみにしてゐる」。（全集一、P259）もう一つの目的は、より深い動機に思われる復讐の方である。夫のために死ぬという名目の下に、まず盛遠の侮蔑を洗い落とし、罪なき婦女の命を奪ったという取り返しのつかない罪を盛遠になすりつけてしまうことができる。

こう見て来ると、彼女の死は、彼らの位置をぐりりと一回転させる計算が含まれている。すなわち、袈裟は封建道德の権化、武士の理想的な妻ということになり、盛遠は日本倫理の凌辱者ということになる。「私は夫のために死ぬのではない。私は私の為に死なうとする。私の心を傷けられた口惜しさと、私の体を汚された恨めしさと、その二つのために死なうとする。」（全集一、P261）しかしながら、彼女が一体死んだかどうか、芥川は我々に教えてはくれないが、それよりも、もっとここで重要なことは、彼女は自分の死を賭けてまで自分の目的を達しようとして必死になっているという人間のエゴイズムの執拗さを深く追究したことである。

同じ年に、『蜘蛛の糸』、『開花の殺人』、『枯野抄』などの、人間のエゴイズムを深く追及する力作が次々と発表されていく。

『蜘蛛の糸』は、作者の持つ、利己の人間性へのあきらめや絶望感を内にひそめていて、決して「明かるい朗らかな童話ではなく、彼一流の暗い人生観が生かされてゐる。人間性に内在する利己主義の救はれなさに絶望しつつも、猶突放し切れない心持が、美しい花や美しい空に飾られたこの童話の底を流れてゐるのである。」（吉田精一『芥川龍之介』P156、三省堂刊）この絶望はこの小説を読み取る重点ではなかろうかと思う。というのは、人間のエゴイズムは結局、自分をも、他人をも不幸にすると語りながら、作者はそこに利己的な人間性へのあきらめを示すだけで、そのようなエゴイズムを克服しなければならないという積極性をちっとも盛り込んでいないからである。小説からわかるように、主人公のカンダダがエゴイズムの醜さに対して、一つも反省的ではない。だから、そういうエゴイズムの醜さを克服して、理想主義的に生きようとする態度など、芥川には全然認められないのである。そこに芥川の絶望の反映がある。つまり、芥川はそれを不可避の人間性と見るので、人間が人間を変え得る力を持つと自信じていない。白樺派中心の新理想主義の時代には、そうした力がある程度まで一般に信じられていたが故に、人間の成長ということが文学上でも重要な題目になっていたのに、芥川の時代にはそれがなくなったのである。この精神的な人間性のエゴイズムへの絶望こそ、後年の彼の肉体への絶望に駆立て、結局自殺にまで駆立てるものとなっていたことは誰にもまだ生々しく記憶していることであろう。この意味から言えば、『蜘蛛の糸』は童話でありながらも、後年の芥川の自殺をいかに理解することに対してかなり重要な作品である。

『開花の殺人』においては、精神の、保持と破産の拮抗する劇を芥川は北畠ドクトルに描き出すことはできなかった。精神の破産に畏縮して肉体を死に追い込む臆病の、弁明しか書けなかった。ここには、「人格を樹立せんが為に死を選んだドクトルの立派さではなく、エゴイズムという自身の正体に怖じけづいて、死を急いだ情けない男の姿があるばかりである。

『枯野抄』を通して、芥川は、「皆師匠の最後を悼まずに、師匠を失った自分たち自身を悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かず、薄暮に先達を失った自分たち自身を歎いてゐる」（全集一、P135）「悲歎かぎりなき」門弟たちの仮面を剥ぎとったのである。人間は本来薄情なものという芥川の人間性の認識が始終作品の底を流れている。

処女作といわれる『羅生門』以来、芥川の目は常に冷静に人間性にあてられていたのである。人間性の奥底に潜んでいる、誰もが触れたくないエゴイズムにびたりと突き当ててきたのである。この『枯野抄』は、結婚をし、彼の短い生涯の中で最も幸福な時期と言われる大正七年に書かれている。そのようなかがやかしい時期にあってさえ、人間の胸底に潜むエゴイズムから彼は目が離れない。この『枯野抄』こそ、芭蕉の弟子たちが敬愛する師の死を前にして演じた醜いエゴイズムの心理的葛藤を描いた力作である。

（三）

芥川の自殺については、多くの異なった意見、推察が発表されているが、七十年経た今でも、

かなりはっきりしない部分がある。が、どんな自殺も複雑であり、必ず謎の要素がまとわりつくものなので、しかたのないことであろう。

宮本顕治は芥川の文学を「敗北の文学」と評価し、頹廢したブルジョア社会を改革する市民としての責任をとらなかったことに、また、自分への絶望をもって、社会全般への絶望におきかえる小ブルジョア社会の「致命的理論」に敗北の原因を見出している。一方萩原朔太郎はこの自殺は敗北ではなく、芥川の勝利を表したものとする。佐古純一郎は芥川が睡眠薬を用いたことに意義を見出し、芥川は生の苦痛から逃れ、永遠のねむりにつかんとする行為だという。これらの観察はそれぞれ芥川の自殺の何かの部分を表しているのに違いないのだと思うが、私は、私のやって来た研究に従って、芥川の自殺は、人間性への絶望であると思わなければならない。

芥川は死後に遺書の一つとして、『或旧友へ送る手紙』を残した。彼はその中で、まず彼自身の自殺する動機を「ぼんやりした不安」(全集八、P114)である。「何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。」(同上)と述べている。将来に対するぼんやりした不安——それは『或阿呆の一生』にあるように、狂人になるかも知れないという肉体上の不安をはじめ、芸術上の不安、経済的な負担を切り抜き得るかどうかという不安、対女性的な不安、社会的な不安、などを含んでいるということを誰でも認めている。しかし、一人の大作家を見るには、まず彼の芸術創作を見なければならない。芥川にとっては、芸術として、何を結晶したのか。これは彼の自殺の謎を解く鍵となることであろう。外見には、ただぼんやりした不安の結晶であったわけであるが、その実は、人間性不信、人間性への絶望の結晶である。彼の文学は人間性不信の文学であると、私は結論したいと思う。

芥川は長くない十二年の文学創作の生涯に、多くの作品を残したが、その創作の始めから終わりまで、物質や、環境では変えることのできない、人間の底に潜むエゴイズムの人間性を、芥川はずっと見つめているのである。彼は多くの作品の中で、人間の醜さ、人間性のエゴイズムの恐ろしさについては、またかと思わせるほど、くり返しくり返し書き、古代の下人、武士、烈女、大作家から、近代的医者、教授、若い母、資本家までのいろいろな人間像を浮彫した。もちろん、これらの人間像のいずれも、さまざまなエゴイズムの実体として造られたのである。しかし、人間性のエゴイズムをあれほどまで指摘した芥川は、ちっとも社会の原因を考えず、救いを願う意識を持つには至らなかったのである。だから、芥川は「アナキストになっても、畢竟我々人間は我々人間であることより、到底幸福に終始することは出来ない」(『文芸的な、余りに文芸的な』全集五、P140)とかたく確信している。それはドストエフスキーが人間の悪を悪として深く追求し、それを精細に描くことにより、ますますそこから救われたいという異常なまでの願いを持ったのとは正に対照的である。

芥川は生涯にわたって、人間性を探究して来たのであるが、芥川の自殺は、人生に対しては「敗北」であるかも知れないが、彼の文学は「敗北の文学」などでは絶対なかった。芥川の死は、人間性不信の文学への道を身をもって指定し示していたのではないか。

「彼の将来は少なくとも彼には日の暮のやうに薄暗かった。彼は彼の精神的破産に冷笑に近

いものを感じながら、(彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかってゐた。) 不相変いろいろの本を読み続けた。しかしルッソの懺悔録さへ英雄的なうそに充ち満ちてゐた。」(『或阿呆の一生』全集四, P64) 人間性確信のうそから脱出しなければ、新たな文学の生まれ得ないことを死ぬ直前の芥川は叫びつづけていた。が、死以外に脱出の方法を見つけ得なかった芥川は、将来に対するぼんやりした不安を抱き続けることよりしかたがなかった。彼が「日の暮の往来をたった一人歩きながら、徐に彼を滅しに来る運命を待つことに決心した」のに不思議はない。いや、唯一の方法、自殺によって人間性確信のうそから脱出し、人間性不信に表現を考えたとき、芥川はかつて何人も登り得なかった芸術の高みに立ったのである。

注：芥川龍之介の作品，評論，書簡からの引用はすべて，筑摩書房刊行の全集（1976年，第9版）によった。例えば，全集五，P294とあるのは，芥川龍之介全集五巻，二九四頁の略である。

参考文献：

- 宮本顕治「敗北の文学」六芸社 1937年
山崎武雄「芥川龍之介研究」河出書房 1942年
吉田精一「芥川龍之介」三省堂刊 1942年
恒藤 恭「旧友芥川龍之介」朝日新聞社刊 1949年
宇野浩二「芥川龍之介」文芸春秋新社 1953年
福田恒存「芥川龍之介研究」新潮社 1957年
葛巻義敏「芥川龍之介未定稿集」岩波書店 1968年
森本 修「芥川龍之介」桜風社 1974年
解釈と鑑賞「新しい龍之介像」1974年
久保田政「芥川龍之介・その二律背反」いれぶん出版 1976年
進藤純孝「伝記芥川龍之介」六興出版 1978年
芹沢後介「芥川龍之介の宿命」筑摩書房 1981年
鑑賞日本文学⑩「芥川龍之介」角川書店 1981年
日本文学研究資料叢書「芥川龍之介ⅠⅡ」有精堂 1981年
中谷克己・吉村 稔「芥川文芸の世界」明治書院 1981年
平岡敏夫「芥川龍之介・抒情の文学」大修館書店 1982年
文芸読本「芥川龍之介」河出書房新社1982年
菊地 弘・久保田芳太郎・関口安義「芥川龍之介研究」明治書院 1983年
福田清人・笠井秋生「芥川龍之介」清水書院 1984年

(原稿受理1997年4月11日)